

ぐ幾多の學者、わけてもわれわれの學問に深い關係のあるソグド語のゴティオ R. Gauthiot や、ベンズニスト E. Benveniste にしても、はたまた梵語のレヴィ S. Lévi、ルーク L. Renouf、ブロック J. Bloch にしても、いずれもその傳統をうけついでおり、バコーやラルーの學風にも、もとよりその精神は流れている。この觀點からすれば、チベット語の研究には、ネパールのネーワリー *Nepali* 語、アータン、シッキムのレプチャ *Lepcha* 語、アッサムのボド *Bodo* 語、ナーガ *Naga* 語等の、いわゆるチベット・ビルマ語族に對する研究も必要であろう。コルデイエの目錄を一見しただけでも、インドの典籍がチベット語に翻譯せられる際に、ネパールの土地およびネパールの學者が擔つた役割はけだし相當なものがあつたことが知られるのである。著者には、すでに「形態論より見たるチベット語文法」(田邊一郎氏と共著、昭和二八)があつて、その方面に對する關心は示されてあるが、一般言語學の領域の中で、さらに、より幅の廣い分野で、チベット語の有する特質を究明し、それ

がチベットの思想や文化に對して果してきた、ないしは果しつつある役割を鮮明にしてほしいものである。ラルー女史が印歐語中心の言語學的温床のなから東洋語獨自のあり方に眼をつけた炯眼には敬服の他はないが、その點では、著者はすでにバコーやラルーを超えていると思われる。しかし、そのようなことが更に確信をもつて云えるために、著者がウオルフエンデン *Wolfenden* 氏の立場からも、更に一層の研究を積まれんことを切望して止まない。本文法書に盛られた研究によつて、著者はすでに自己の學問的立場を樹立したのであるから、たといチベット・ビルマ語の領域に、研究を擴大せられんとしても、デュール *Jacques Dürri* 氏のように、苦境に陥入ることは、まずあるまいと考えられるからである。——本文三六三頁、附録四四頁、諸索引二〇頁、文部省科學研究助成費、研究成果刊行費の補助による出版、昭和二九、一〇、法藏館發行、定價二、一〇〇—

(佐々木教悟)

西藏佛教研究 長尾雅人

西藏佛教の研究は、世界の諸學者によつて幾多の收獲があげられてをり、その風貌は概ね明かにせられたといつてよい。しかし從來の西藏佛教の研究は、主として歴史のあるひは習俗的な面にむけられた外貌に關する研究であり、教義に關する内面的研究は比較的ゆるがせにされてゐた。教義的な研究の諸資料は、西藏大藏經とは別に、いはゆる「藏外文獻」として尠大に存在するのであるが、これの解明には文獻のあるひは語學的な大きな障害が伴ふために、これら文獻の研究は今なほ殆んど學界に發表せられていない。ここに紹介する長尾博士の「西藏佛教研究」は、この障害をのりこへて始めて西藏佛教の内面への突入を試みた勞作である。

本書に於いて取り扱はれる文獻は、宗喀巴 (*Bsod-tka-pa*) の著である「菩提道次第論」(*Tam-rin*) の毘鉢舍那章であり、この毘鉢舍那章の譯出が本書の中心をなしてゐる。周知の如く宗喀巴は、西藏へ入つた印度大乘佛教の諸流を統

一し、西藏佛敎學を大成した稀有の學匠であり、嚴格なる戒律の生活を唱導し、遂に新敎改革派いはゆる黃帽派ラマ敎を樹立した宗教的偉人である。そしてその著「菩提道次第論」は、彼れの立場から見た佛敎概論ともいふべき著作であり、數多き彼れの著作中、「祕密道次第論」(Shags-rim)とともに彼れの主著となつて、ラマ黃敎の根本聖典となるものであつて、本書に譯出される毘鉢舍那章はその最後の三分の一に相當し、「菩提道次第論」のなか、最も中心な權要の部分となしてゐる。それゆゑこの勞作が、西藏ラマ佛敎の教義學研究として最も基本的な重要性をもつものであることはいふを俟たない。著者は毘鉢舍那章を譯出するに當り、讀者の理解の便のため、これを七章に分ち、さらにこれに四十八の區分を與へてゐる。そこでこれによつてその内容の概觀を紹介すると、次のやうである。

第一章 序論 奢摩他より毘鉢舍那へ、了義敎と不了義敎、中觀の傳承、悟入の次第 第二章 眞實空性の決擇 否定せらるべきもの正しき把握、虛無論的なる空、中觀不共の勝法、中觀への邪解、中觀邪解への論駁、特に斷見との區別 第三章 誤れる空論と正しき空論 正理による否定への誤解、量による否定への誤解、言說無自性の立場、生起の否定への誤解、有の否定への誤解、理論的否定に終始するもの、正しき否定の對象、輪廻の根本—無明、その他の否定せらるべきもの、特に「勝義として」の否定 第四章 否定と應過—獨自の兩論 應過論と獨自論、應過論への四つの誤解、その論駁第一—第四、獨自論の過失(宗法の不成立、喩の不成立、因の不成立)、應過論の無過なる立場 第五章 人法二無我 人無我、車の喩、人無我と無自性、人我如幻、我所の否定、無自性と緣起的世間、法無我—四種不生、無自性と眞實の智慧、二無我による障の斷除 第六章 毘鉢舍那の諸相 毘鉢舍那の差別、毘鉢舍那に對する謬解、毘鉢舍那修習の正義、毘鉢舍那修習の要點、毘鉢舍那成就の諸相 第七章 結論 止觀雙運の軌、道の總義、金剛乘の學習、結語。

右の章節を見て直ちに理解できるやうに、毘鉢舍那章は宛然、印度中觀學派の論書、すなはち理論哲學書たるの觀をもつてゐる。これは既に知られる如く、宗喀巴の敎學が、瑜伽行派をも自らのうちに包攝したといふ、月稱(Candrakīrti)の流れをくんだ後期中觀哲學思想によつて形成されたものであるからであらう。著者の意見によれば、印度佛敎哲學史の展開は、西藏に移つて實地に行はれ、ラマ敎はいはば西藏に於ける佛敎の印度的發展の歸結に他ならない。したがつて宗喀巴の敎學は、月稱などの中觀論師の著作が傳はらなかつた中國の三論宗の中觀哲學とはかなりの距たりを示し、印度中觀哲學思想の研究に直接大きな示唆を與へるものであることは明かである。また宗喀巴の敎學が印度中觀思想の歴史的發展の歸結であるとするならば、彼れの敎學はただに印度中觀思想の研究に示唆を與へるといふにとどまらず、印度中觀思想が十五世紀の宗喀巴に至るまで、いかに展開しいかに歸結したかのプロセスを物語るものとして、重要な意味を荷ふものといはねばならない。著者の研究はこのやうな意味で、我々を裨益することとすこぶる多大である。ラマ敎といへば、密

教的な行法の色彩のみを強く思はしめるものがあるが、この謬見は本書によつて全く拂拭せられ、ラマ教の印度佛教學的な理論哲學的の性格は、如實にその本來の姿を明かにしたといつてよい。毘鉢舍那章に於ける、經典よりも論典の煩繁な引用は、またその理論哲學的な性格をよくあらはしてゐる。かくの如き印度佛教學的な西藏佛教學が存在することは、たしかに一の驚異である。

「菩提道次第論」の翻譯については、ツイビコフ(Cybilov)の露語譯の一部分の出版と、民國二十五年に重慶から法尊法師が出版したのがある。ことに法尊法師の中國語譯は優秀であり、漢譯の存在する經論の引用文は一々これを轉載する。しかしその刊本や頁數など、その他一切の註記を附さず、現存梵本への参照や梵語原形を考定する等の印度佛教學への關係づけが全く行はれてゐない。これに反して、本書に於ける著者の業作はまことに行きとどき、引用經論に對する註記は完璧であるといつてよく、重要術語に對する梵語原形の考定も詳細にして嚴密であり、本書の價値をいやが上にも高

からしめてゐる。これは著者の優れた語學力と深い佛教學的知識との、よき調和の結果えられたものであることはいふまでもない。しかしながらまた我々は、ここに著者の多大の勞を思はざるをえない。なほ本書の第一部は、西藏佛教學研究の方向、西藏佛教學の内容と特色、宗喀巴の傳記に關する考察、『菩提道次第論』の成立・内容、宗喀巴の全集目錄について、の五章を收め、西藏佛教學の價値について啓發せしめられる所が多い。佛教學にたづさわる學徒の敢て一讀し、座右に備へられんことを望む。(一九三九年九月刊・A5四五六頁・索引目錄五六頁・七五〇圓・岩波書店)(安井廣濟)

業の研究 良橋一哉著

「業の研究」と題する前編と、「梵藏所傳よりする俱舍論業品の註釋的研究」なる後編と、及び「三世實有說の一考察」なる附録の小論文一と、より成る。

前編は「俱舍論業品の所說の中で、業思想に直接關係のあるものだけを取り出し、これを婆娑論・成業論・成實論・南傳の法集論註などの所說と照し合はせ、

更に遡つては阿含經の所說と比較して、果して俱舍論の業說は、佛敎本來の立場からは認せらるべきものであらうか、或は批判せらるべき點があるならば、如何に批判せらるべきであらうか、といふやうなことを纏めて述べて見ようとした」(はしがき三・四頁)もの。論述は、嘗て著者の先師故赤沼教授がその阿含における業說についての論究の最後において「極めて重大な問題」として殘され「將來の解決」を俟たれた(佛敎教理之研究四六一頁)宿作因說と業論との相異の問題を、業論と緣起說とを連關せしめて理解することによつて解決せんとするに始まる。著者によれば、人間の行爲的生活(即ち業)が心を規定すると同時に、又逆に心が行爲的生活を規定する、そしてそのやうな關係の上に人間の感受する苦樂のあり方が規定される、といふことを明す點にこそ、阿含の、從つて佛敎の、業論の主眼點があり、その點においてそれは宿作因說とは明らかに區別されなければならぬ。かくの如く、業は心を内容づけ規定するのであるから、(1)業は單に「行爲」を意味するだけではなく、そ